

航空機の排気ガスによる悪臭

航空機のエンジン調整等による排気ガスの悪臭問題について、町民からは、「悪臭がひどく目が開けられない」「気分が悪くなる」といった被害を訴える声が町に寄せられている。これまでの調査から、市街地近くに駐機している「E-3早期警戒管制機」が悪臭の主な発生源であることを裏付ける結果が得られている。

航空機事故

嘉手納町民は、たえず航空機の墜落事故などの不安と危機感の中で生活を余儀なくされてきた。沖縄県の統計（令和3年12月末現在）によると、復帰後の米軍航空機関連事故（発生場所別）において、基地内648件中602件（92.9%）が嘉手納飛行場で発生しており、町民は常に危険と隣り合わせの状況下にある。嘉手納基地に関連する主な航空機事故は、次のとおりとなっている。

年 月 日	主 な 事 故 概 要
昭和34年6月30日	嘉手納基地所属F-100ジェット戦闘機が石川市宮森小学校に墜落、炎上。児童を含む18人（後に後遺症で亡くなった1名を含む）が死亡、重軽傷者210人
昭和37年12月20日	KB-50空中給油機が字屋良に墜落炎上、村民の死者2人、重軽傷者8人、住宅3棟全焼
昭和41年5月19日	KC-135空中給油機が（コザ市と嘉手納村との境界）墜落、村民1人が死亡
昭和43年11月19日	B-52戦略爆撃機墜落爆発（村民の重軽傷者16人、校舎・住宅等365件の被害）
昭和62年5月19日	嘉手納基地所属F-15イーグル戦闘機1機が沖縄本島東海上に墜落
平成元年3月14日	嘉手納基地所属HH-3ヘリコプター1機が伊江島沖で訓練中墜落、乗員2人救助、残り3人は行方不明
平成5年9月1日	嘉手納基地所属HH-3ヘリコプターが滑走路を移動中に事故を起こし、兵士1人が死亡、4人が重軽傷
平成6年4月4日	嘉手納基地所属F-15イーグル戦闘機1機が離陸直後、沖縄市白川の米軍提供施設区域内に墜落し爆発（パイロットは脱出）
平成7年10月18日	嘉手納基地所属F-15イーグル戦闘機1機が沖縄本島南海上に墜落
平成11年6月4日	アリゾナ州ユマ基地所属AV-8Bハリアー攻撃機1機が離陸に失敗して滑走路わきへ墜落炎上。パイロットは脱出
平成14年8月21日	嘉手納基地所属F-15イーグル戦闘機1機が沖縄本島南海上に墜落
平成18年1月17日	嘉手納基地所属F-15イーグル戦闘機1機が沖縄本島北東海上に墜落
平成25年5月28日	嘉手納基地所属F-15イーグル戦闘機1機が沖縄本島東沖の訓練区域に墜落
平成25年8月5日	嘉手納基地所属HH-60救難ヘリ1機がキャンプ・ハンセン内に墜落炎上、乗組員1人死亡
平成27年8月12日	嘉手納基地を離陸したケンタッキー州フォートキャンベル基地所属MH-60型ヘリコプター1機がうるま市伊計島の沖合で、米海軍輸送艦への着艦に失敗し墜落
平成28年9月22日	嘉手納基地を離陸したノースカロライナ州チェリーポイント海兵隊航空基地所属AV-8ハリアー攻撃機1機が、沖縄本島東海上に墜落。パイロットは脱出
平成30年6月11日	嘉手納基地所属F-15イーグル戦闘機1機が、沖縄本島の南部の洋上に墜落、パイロットは脱出
令和2年8月4日	嘉手納基地所属F-15イーグル戦闘機から機体の部品が落下、落下場所は不明

環境汚染事故等

基地内からの航空機燃料及び合成洗剤の流出事故もしばしば発生し、地下水、河川を汚染した。屋良地域では、地下に染み込んだ航空機燃料油によって、昭和42年5月頃から井戸水が汚染され、同43年6月には嘉手納地域でも同種の汚染が判明、汲み取った水に火を近づけるとパッと燃え上がり「燃える井戸」として危険な状態にあった。その後、燃料油が自然浄化されるにつれ、菜園への散水に利用されるまでに回復したが、井戸の一部は、ずっとふたがかかけられ現在でも使用されていない。

平成10年8月には、元基地従業員からの証言により、1970年代に嘉手納マリナー近くの基地内にあったとされるため池にPCBを含む廃油が投棄されていたことが、地元新聞から報道され社会的反響を呼んだ。

平成19年5月にジェット燃料4,000ガロン（ドラム缶約76本分）が流出した。環境への影響はわずかであったものの発生から1週間後の公表に通報体制のあり方が問われた。

平成22年9月に嘉手納飛行場にある燃料貯蔵及び輸送地区の燃料輸送タンクでJP-8燃料約780ガロン（約2,950リットル）が流出、同年12月にも嘉手納弾薬庫地区でJP-8燃料が約40ガロン（約151リットル）流出する事故があった。

平成31年1月には、沖縄県が実施した嘉手納基地周辺の水質調査において、町内の湧水や地下水から高濃度の有機フッ素化合物が検出され、基地による水質汚染が懸念されている。

令和2年6月に嘉手納飛行場内の危険物取扱施設で火災が発生し、施設内に保管されていた次亜塩素酸カルシウムが消火のための放水と反応し、塩素ガスが空気中に放出された。地元地域への影響はなかったものの、塩素ガス発生について火災発生から10時間後の情報提供に通報体制のあり方が問われた。